

---

# ウレハ

いみたん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ウレハ

### 【Zコード】

N7681Z

### 【作者名】

いみたん

### 【あらすじ】

クリスマスの夜、真紀は逃げるよう地元へと帰郷する。

母校の回りを歩いていると、女子中学生にライブのチケットを押し売りされ、しぶしぶと公民館へと入った。

羽柴良太は、親友であるひきこもりな橋本恭介を連れ出すべく、荒療治としてライブへと出かけた。

隆は松尾淳一の紹介でバンドのヘルプを頼まれヴォーカルとしてス

テージに立つた。

ベースの男は遅れている、バンドのヴォーカルが到着するまでの間、時間稼ぎに流行曲をのコピーをしようと隆にもちかけるが、隆はこれに断固として反対した。

そのとき、会場に居合わせた、真紀を指差し、「あんたにこの曲を捧げる、メリークリスマス！」と、言った。

隆のこの行いにベースの男は更に怒りをつのらせ、襟首をつかんだ。騒然とする中、このバンドのメンバーである、山中椿は、場の空気を収めるために、ギターをかき鳴らした。

頃合いを見て、隆は歌い出した。

歌唱力の高い隆の歌声に場内は歎息とする。

居合わせた者は隆にだれも文句を言えなくなつた。

隆が会場から出て、バイクのエンジンをかけていると、隆の後を追つてきた真紀が話しかける。

オリジナルだという先ほどの、即興に驚く真紀だった。

二人は意気投合し、逃げるようになに会場を去つた。

## 『第一部 プロローグ（前書き）

この物語は、当初同人ベルゲームで、商用を考えておりましたが、諸事情により、制作を断念いたしました。

イラスト（立ち絵）、物語が半ば出来上がった状態です。  
多くの人に楽しんで頂くために、今回公開に踏み切りました。

イラスト（立ち絵）一枚絵などは、アメブロの方で展開していくつもりですので、この作品『ウレハ』をより楽しみたい方はそちらに目を通してください。

<http://ameblo.jp/imitant2/>

## 『第一部 プロローグ

恋人たちが肩を寄せ合い、色とりどりのネオンが街を包む。

だれもが寂しさとは、無縁でありたいと願う今宵焦燥感を隠した女は、電車に揺られ、都會から田舎へと帰郷していた。

時折ため息をつき、窓辺から流れる景色をぼんやりと眺めて、車内に漂う温かい雰囲気を押し扱うように沈黙している。

数少ない乗客たち、家族連れや、学生カップルは皆幸せそうな顔をし談笑していた。

その中でぽつりと、取り残されたように女は座っていた。化粧や服装がパツとしそぎ、右手には山、左手には海と、囲まれているこの田舎では、余りにも不釣り合いに見えた。

全体的には小作りな顔立ちをして、さっぱりとした印象だが、端正な顔立ちである。

「SAYAの新曲聴いた？」

「あれってクリスマスソングだよな」

学生カップルは談笑している。それを見て女は、疎ましそうに顔をゆがめた。

電車がゆっくり駅に止まると女は立ち上がった。

構内は巨人が押しつぶしたように低く、一般的な広さからすれば大分狭かった。

駅には人がまばらだった。

改札を通り、女は外に出ると、

「珍しい。この時期、この町に雪が降り積もるなんて……何があつたの？ あ、私が帰ってきたからだ」と自嘲した。

辺りを見て、田の前にあつた空席表示のタクシーに乗り込んだ。

「城西中学校までお願いします」

運転手に声をかけ女は深く腰を据えた。

少年は、扉の入り口に立ち、何かを引つ張つている。

「恭ちゃんてば！ もうライブ始まつてるから、今から行つても、クラスの人にはそんなに会わないよ」

と言つて、さらに細腕に力を込めた。

その小柄な少年は、厚ぼつたい前髪で目元は隠れ、頬はそばかすで覆われていた。

「やだよ、良太君、俺」

と言つた声の主は扉の中にいて、ここから先には出まいと、冊子に手をかけている。

中にいる少年の方は体格もふつくらしており、身長もかなり高いので、小柄な少年の努力は、焼け石に水といった具合である。

「良太君の家に行くつて言つたから出てきたのに、俺だまされるところだつた」

「だからこうして、打ち明けてるんでしよう」

小柄な少年はそれでも、負けじと引っ張つていて。

「とにかく、俺いかない」

「山中さんが参加してるつて言つても？」

体格の良い少年は力を緩めた。その瞬間、小柄な少年の腕はすべり、鉢植えを倒しながら転んだ。背中にある手すりから下を覗いて、

「いつたあ

「ごめん……」

「あぶないよ！ これでもう、行くしかなくなつたね」  
扉の下はおよそ、十メートルの高さがあり、落ちると笑い事ではすまない。

体格の良い少年が小柄な少年に手を貸す。

「大丈夫だよ、僕が保証する。チケットもほりー！」

そう言つて、微笑すると、体格の良い少年はあいづちを打つた。

壊れかけの街灯が点滅し、夜の校舎をぼんやりと照らしている。グラウンドの端にはテニスコートがあつて、ネットが張られていた。

女は体を抱くよつにして、歩いている。

「懐かしいな、でもむなし……」

辺りを見渡すと、道路を挟んで、テニスコートから反対の方向にある公民館から明かりがもれていた。

「こんな建物あつたかな？」

と、女は言つて歩き出した。

すると入り口からサンタクロースの姿の少女が出てきて、踊り場から階下を、首を左右に振つて覗いている。

そこで、女を見つけると、

「あの　あの！　その人、」（）でライブしてゐるんですけど、見に来ませんか？」

女は訝しそうに、階段上の踊り場を見つめて、

「そこの人つて私だよね？」

と、言つて、女はその場所まで歩み寄る。

「そうですよ、今なら特別にただで！」

と言つて、サンタクロースの格好をした、少女は笑つた。

「ちょっと待つてちょっと待つて、うーん、ライブ……ライブか」

女が悩んでゐると、

「あの、失礼ですけどどこかで、会つたことありませんか？」

と少女は言つた。

「うまいなあ。久しぶりに、じつに帰つてきたから、それはないかな」

「わー、どうりでカッコイイ

「まあ暇だし、いいか……高校生？」

「チコウニです。わーい、それじゃ、中に入つてきてください」

「若いねえ」

と言つて女は階段を上る。中からは何やら騒がしい音が聞こえ、

それが怒鳴り声だとわかると女は、後悔したのだった。

「所詮こんなものか」

少年はそう小声で毒づいて、ステージを見下ろした。

公民館の中は学生でごった返していた。

「えーと何だつて隆くんだつて？ ちょっとライブ中にみんなごめんな」

ベースを抱えた男は、観客に一度謝り、少年の肩に手を回した。男の金髪の頭頂部は黒く、不健康な顔立ちだった。

少年は嫌悪感を隠すことなく、中性的な顔立ちをゆがめた。

「次の曲それで行くから」

そう言つてベースの男は、楽譜をスタンドに置いた。

「俺、この曲知りませんし、楽譜読めません」

少年は一通り目を通して言つてから、ベースの男から視線を外して観客席を見つめ、

「松尾！ これつきりだ！」

と、続けた。

「そんなこと言わずにさ、学生でこの曲知らない人いないよ。後半、オリジナルの曲持つてくるんだけど、時間余りそうでさ」

ベースの男は、マイクを避けるように小声で言つた。

「だから知らないから、歌えませんって……」

少年はそう言つて、意味のないやりとりに嫌気がさしたのか、ステージの右端にぽつねんと立つ、ギターを抱えた少女の方を向いた。

「ねえ、隆君だったよね、聞いてる？」

「松尾君にヘルプ頼んで、君に来てもらつたのに使えないよね……」

少年はギターを持つ少女を、睨みつけるように見つめ、少女もそれに答えて驚いたように睨み返してくる。

少女はボブカットに、エースのトランプ柄のティーシャツを着込み、チェックのミニスカートに、色落ちしている先がとがった革のブーツを履いている。愛くるしい童顔な顔つきで目尻はつり上がり、身

長は相当低かつた。

始まらないライブに、次第に観客たちの話し声が大きくなる。「わからなくてもいいからせ、適当に呑わせてよ。開始早々これじや遅れてくるヴォーカルに、申し訳ないでしょ」

少年はベースの男を見上げた。

「適当に歌え？」

少年はそう言って、田の前にあつた楽譜スタンドを、勢いよくはねのけた。

「ふざけんなよ！ こつちは、やりたくもねえのに、松尾だから頼まれてやつてる。はあ？ はやりの歌のコピーやるくらいなら、バンドなんか組むんじやねえ、義理で一千円も払えるか！ 五百円の価値もねえ！」

観客席、最前列に立っていた、面長の少年が額に手を置いた。

ベースの男は数秒惚けたしていただが、すぐに険しい顔つきに変わり、少年の襟首をつかんだ。

「テメエ、なにさまのつもりだよ！ ただのすけっとだろー！」

ベースの男はそう怒鳴った。

「それはこつちの台詞だよ。おまえがなにさまかつてんだよー。」

二人は押し合い、床にあつたコード類が散らばった。

ドラマの神経質そうな男は、ドラマスローンからやつと立ち上がり、喧嘩の仲裁に入った。

「ガキがバンドを知らないくせに」

「おーいみんな！ 特にこの男田端で来てる女子帰れ！ ガキとか高校生に言つてるぞアリエネエ！」

少年はベースの男に殴られステージの端に追いやられる。

そのとき、黒山の人だかりを避けるようにして、ライブなんて眼中にないといつよつに、顔をステージから背けて立つ女に田端がとまつた。

（こいつも俺と同じか……こうなつたら何もかも壊れてしまえ）

少年はマイクを引っつかみ、

「 そこのギンガムチェックの人！」

公民館の隅にいるその女を指さして、

女は（？）自らを指さした。

「 そう、あなた、センスというか雰囲気がいい。あなたにこの曲をささげるぜ！ メリークリスマス！」

と、少年は言った。

会場からはブーイングの荒らしが起きた。

「 おまえもう帰れよ、クソガキが！」

と、ベースの男は肉薄した。

ライブは手がつけられないような、状態になつた。

するとそのとき、ステージのスピーカーから、大音量でギターの音が刺すように走り抜けた。

ギターを抱えた少女は目を閉じ、弦を、叩くようにはじいている。始めはただの爆音で、馬のいななくような音が、次第に整つてき

た。

少女は高速で指を操る。

観客は吸い込まれるように、彼女を注目した。

徐々に演奏はフェードアウトし、マイクを持つ少年は、ギターをひいている少女へ、視線で合図を送ると、マイクを抱え込むように持つた。

ベースの男は釈然としない様子だったが、これを期に自分の位置に戻つていった。

少年はまるで何かに魅入られたように、頭を揺らし歌い出した。ギターはコードを変調させ、少年の歌声と重なり合つた。

ドラムとベースも、たどたどしくはあるが、ついてくる。

それらは一体となつて、少年の力強くて芯が通つた歌声に、導かれていった。

いつのまにか、観客は静まり返り聴き入つていた。

少年は掌を上にして水平に腕を上げ、半拍置いてそれを下げる。

その合図をきっかけに音が収束する。

少年はゆつくりと目を開けた、両目は涙で濡れていた。

無言でマイクを置いて、ステージを降りて歩き出す。

パチパチと拍手が起き、一気に爆発した。

少年が扉の取っ手に手をかけたとき、

「ちょっと隆君！？」

と、ベース男の声が場内に響いたが少年は、無視をし扉を開けた。モップコートのポケットに手を突っ込んで、階段を下りる。ステージのちょうど真下に、駐輪場があつて、そこにバイクはあった。

少年は、駐輪場に止めてあるバイクに、腰を掛けハンドルロックを外した。

流線型のボディ、戦闘機のよつたスタイルでワインカーはついていない。スクーターのような形をしているが、ナンバーからして原付きではないことは伺えた。

キックペダルを踏み込む。それを数回繰り返すがエンジンはかからない。

「おい、がんばれよ！」

少年はバイクに向かつて言つた。

「かわいいバイク

少年が振り返ると、ギンガムチェックの服を着た女がそこにいた。

「あ、さつきの女」

少年はそう言つて、バイクのエンジンをかけるのをあきらめ、シートに腰をかけ女と向き合つた。

「歌うまいよね。題名聞かせて！」

「題名つて言つてもな……さつきできた曲だし……勝手につけていいよ」

「え？ 即興で全部やつたの？ ウソだ！ ギターの子とす、ここ口ラボしてたし」

「ギターね、あれは特別。でも、さつき浮かんだメロディだし、そ

う、あんた見て作ったから、何かのイメージにはなってるかもな」

女は少年の肩をつかむと揺さぶった。

「お願いだから違つて言って、実は邦題があつたりするんでしょう?」

「アリエネエこの人しつこいよ、何、何、これつてナンパ?」

と、少年は笑いながら言った。

「声をかけたのはそつちが先!」

それから、女は妙に真剣な表情をして手を離した。

「俺は隆そつちは?」

「わたしは真紀」

「二人ともありふれた名前だな」

少年はシートから腰を上げると、全体重をかけるようにキックペダルを踏んだ。

白煙がマフラーから出て、パンパンと音が響く。

そのとき、階段の下に数人が現れた。中でも、サンタクロース姿の少女は腕を組んで、バイクにまたがる少年を見つめている。

少年は慌ててジョッキーヘルメットを被ると、

「ヘルメット貸して!」

女も慌ててそう言った。

モツズコートのファスナーを上げると、少年はバイクを走らせた。鉄骨で覆われた低い天井に、ハチの羽音のようなマフラー音が響いた。

アスファルトを滑るように進む。

雪が一人の肌を叩いた。

先頭に立つ面長の少年は、バイクにまたがる二人を見て、額に手を置いた。

サンタクロースの姿の少女は、険しい目つきで睨んでいる。

少年はニヤリと笑つてアクセルを回した。

羽柴良太は大声で、

「恭ちゃん起きて！ 新学期だよー。」

と、言った。

橋本恭介は耳元で聞こえる、騒音から逃れようと、布団の中に潜つた。

「今日から学校行くって、約束したよね」

良太は恭介の肩を揺さぶる。

「俺、やつぱり行かない……」

「恭ちゃんは、嘘をついたりする人じゃないよね」

と、言って、良太は布団をはがした。

「わかつたから……」

「恭ちゃんが行かないなら、僕も学校休む」

恭介はやつと起き上がった。目をこすりながら、

「用意するから、下回つてて」

と、恭介は言って、部屋を出た。

橋本家は一階建てで、この部屋から出てすぐ右側には、外へと降

りる勝手口があつた。

良太はいつも勝手口から、この部屋まできている。

恭介の両親は引きこもりな息子を思つて、良太に定期的に電話をし、外に連れ出してほしいと頼むが、良太は言われなくとも、そうするつもりだつた。

外で待つていると、恭介は出てきた。眩しそうにしている。

身長はとても高く、肥満とはいかなくとも肥満の子供くらいには太つている。

これといって顔の特徴はないが、太い眉が柔らかい印象に不釣り合いである。

良太は恭介に比べると身長の低さは際立つてゐる。

前髪は顔を隠し、陰気な印象を与えている。

「恭ちゃん、おはよー！」

「お、おはよう良太君……」

それから一人は自転車で学校へと向かつた。高校は市内の外れにあって、橋本家から自転車で二十分程度の距離だった。

ここ、鶴左市は海の幸、山の幸が豊富で、日本全国でも有数のリース式海岸を備えている。県からは南東部に位置し、人口はおよそ七万人。そんな九州の田舎である。

良太はペダルを踏みながら思案した。

恭ちゃんをこれから、毎日学校に通わせるには、僕はどうすればいいんだろう……何か良い方法ないかな？ やっぱりあれしかないかな……でも、

半ば答えが出ているが、躊躇つっているのだろう。

そんな良太を知つてか知らずか、恭介の表情は、学校に近づくにつれ強張つていく。

「大丈夫だつて、僕らそんな目立つ存在じやないし、案外みんな気にしないと思つ」

「……」

一人は並走しながら話している。

「それよろしく、今期アーメット、できよくなによね……」

良太は恭介の緊張を、和らげようとしているが、効力はないようだ。

校門に差し掛かる頃には、恭介の緊張はピークに、達しよつとしていた。

「俺、やつぱり帰る……」

恭介はブレーキをかけて、止まると言つた。

「駄目だよ！」

慌てて良太も止まる。

行き交う生徒は、そんな一人を見て冷笑している。

そのとき、一人の横を、ギターを背負つた女子生徒が通り過ぎていった。

身長は低く、まるでギターに押し潰されそ�である。

良太は自転車を、恭介の横につけて、

「このままでいいの？」

と、ささやいた。

恭介は顔をしかめ、耐えるように、駐輪場へ向かった。

良太も後を追いかけた。

二人は三階の2-Fと書かれている、教室に入った。

恭介の足取りは、教室に入るまで重かつた。

一人が扉を開けた瞬間、視線が集まつたが、それも長くは続かず、意外と、あつさりとしたものだった。ただ、クラスの生徒からは、疎外されている感じではあつた。

良太の席は窓際の一番後ろの席で、恭介はその前だった。恭介はおずおずと席に腰を下ろすと顔を机に向かた。

「大丈夫？」

と、良太は声をかけたが、恭介は黙つていた。

しばらくすると担任がやつてきて、ホームルームが始まった。

始業式の間、良太はクリスマスライブを思い出していた。

きつかけは朝方見かけた、山中椿だった。椿はライブ中ギターを担当していて、会場の騒ぎを収めた張本人だ。あのギター演奏がなければ、ライブは中断していたのかもしれない。

バンドをすれば、前の恭ちゃんに戻るかもしれない。

それほど、あの日のライブは、二人にとつて刺激的だったのだ。

ヴォーカルの人つて確か、A組の人だったかな……あのとき正式なメンバーじゃない、みたいなこと言つてたし……。

とにかく良太は声をかけて、バンドに誘つてみよつと考えた。

学校が終わると良太は、恭介に先に帰宅してもらい、校門近くで

A組の彼を待つた。

しばらくすると彼はやつてきた。

話しかけようとしているうちに、尾行するような形になった。

市民体育館で右に折れて、良太も慌てて追った。

距離を縮めた。

彼はバイクにまたがっていた。

「あの……」

良太はおごそかに言った。

「クリスマスライブで、ヴォーカルをしてましたよね。すごく歌上手なんですね。僕、F組の羽柴良太と言います」

「で？ 何？」

「それでその……バンドのメンバー募集してまして、あの……お名前聞いてもよろしいですか？」

「バンド、おまえが……？ 僕は隆な」

「それでは改めてお願ひします、隆君……一緒にやつてくれませんか」

「わるい、アリエヌ……おまえ本気で言つてるそれ？ それより俺がバイクで、学校通学してること、ちくつたらぬるさんぞ」と、言つていつてしまつた。

隆の突き放すような態度に、最後は何も言えない良太だった。

「間が悪かったのかな……」

良太はあきらめて、帰宅することにした。

机の棚や壁にはアニメグッズ、フィギュアや、ポスターなどがあつた。

整理された室内だつたがそれら物が圧迫している。

良太は帰宅すると部屋にすぐこもり、パソコンの電源を入れて、ネットサーフィンを始めた。

ブラウザを起動させ、検索単語を入力する。「歌手」や「バンド」といった文字が並んでいくディスプレイを、真剣な眼差しで追いか

けている。

「なるほど、バンドをするにしても、僕はどんな楽器を演奏するんだろう」「

最も大事なことを、忘れていた良太であった。

「それに、恭ちゃんは賛成してくれるの？」

ネガティブな思考に押され、溜め息がこぼれた。

僕は周りが見えてないって、昔の恭ちゃんにしかられてた……。ともかく、普段アニメソングを聴いて過ごしているので、流行曲でも聴いてみようと、「JPOP」と動画サイトで検索をかけた。一番上にあつた動画を、良太はクリックした。

すると、女性アーティストの静止画が現れ、音楽が流れ出した。クリスマスソングが流れている。

良太は曲を聴きながら、コメント欄に曰がいく。

「だれだ？ SAYAの曲無断でアップしてやつは、やめり！」

「貴重な画像ネットに流すな」

「こまどきアーティンの曲を、ネットに流して注意する親切なやつがいるとはな」

「何がアーティンだ、おまえらがいるから、ジャケットの表面にキモイ絵が入ったんだよ。SAYAの画像は貴重なんだよ！」

「メント欄には罵詈雑言が飛び交い、收拾がつかないような状態になっていた」。

それから良太は気になつて、匿名掲示板で同様の記事を探したが、スレッドタイトルに「一次元と三次元の戦い」などと題しているものまである。

しばらく記事を見ている限りでは、SAYAという女性シンガーや、新曲ジャケットの表面に、アニメの絵を使っていた、ということがらしい。

これだけなら何を大げさに、と感じるかもしれないが、そのSAYAというシンガーは日本で最も認知度が高い歌手で、そして音楽活動以外行っていない。テレビにもラジオにも雑誌にもでない、し

たがつてファンはCDについている、ブックレットからしか彼女の姿を見ることはできない。つまりファンは、アルバムジャケットの、アニメ挿し絵事態、気にくわないのである。

良太が掲示板を見ていると、祖母の夕食を呼ぶ声が聞こえたので、良太は部屋を出た。

夕食後しばらく、祖母と祖父とでとりとめもない団欒があつた。良太は恭介と同じ学区内になるために、両親とは離れて暮らしていく。

元来おばあちゃん子だった良太は、祖父母と暮らしていることに、恥ずかしいや煩わしいといった、若者特有の感情は抱いていなかつた。

夕食後、入浴を済ませ再びパソコンの前に座つて、バンドのことを調べていった。

とにかく 隆君にヴォーカルを頼むにしても……最低でも後一人、メンバーが足りないよね……ギターとベースとドラム、僕はどんな楽器が向いてるんだろう……。

「よし、うだうだ考えてても何も始まらないよね」

と、良太は言ってキーボードをカタカタと叩いた。

「バンドメンバー募集します。メンバーになりたい方は僕、羽柴良太まで連絡してください。090-\*\*\*\*\*-\*\*\*\*\*」

それから文字をプリントアウトし、ブレザーのポケットにしまつと、ベットに横になつた。

担任から掲示板利用の許可は下りたが、バンドメンバー募集という紙面を見て、以外そうに眉をひそめて言われたのだ。

「羽柴がバンドねえ……」

不謹慎だと思ったのか、担任は咳払いで「まかしていた。良太は今日も恭介を、学校まで登校させることに苦労したのだ。担任が教室から出て行き、どつと疲れたように席に戻り腰を下ろした。

「良太君どうしたの？」

と、恭介は聞いてきたが、

「何でもないよ」

と、バンドの件を伏せる良太だった。

恭介は案外平気そうな表情をしているが、良太はこれがずっと続くとは思っていないのだろう。些細なきつかけで登校拒否に陥るものだ。

だがしかし、原因にいたつては星の数ほどありそうだが……。

午前の授業も終わり、良太は一階に下りて、職員室横の掲示板に、昨日のうちに作成したメンバー募集の紙切れを張った。

恭介はそんな良太を見て言った。

「良太君バンドするの？」

「まだやることがあるんだ」

良太は職員室前で、大木のようなくつ立つて、恭介を置いて先に行く。恭介も無言で後を追つた。

「早くしないと、お弁当食べる時間がなくなっちゃうね。僕、A組に用があるから、恭ちゃんは先に食べていいよ」

と、良太は言つて階段を上がつている。

A組の前に到着し、良太はガラス戸から中を見渡している。そして隆を見つけると、やおら入室したのだ。

恭介は窓際に所在なげに立っている。

「あの、昨日はいきなりでした、ごめんなさい。今、大丈夫ですか？」

と、良太は言つたが、隆は歯牙にもかけていない。

机一つ並べた隆の向かい側で、弁当を食べている松尾淳一は、チラチラと隆を伺つているが……。

「僕たちのバンドの、ヴォーカルになつてくれませんか？」一人足りてませんが……先ほど職員室に、張り紙をしてきたところです」

隆は顎を突き出し、はしを置いてから言つた。

「俺、飯くつてんだけど……何おまえ？ 昨日言つたるバンドはしねえつて」

「はい、でも……昨日は間が悪かつたのかなつて思いまして……」

「今はどうだ？」

「とても悪いみたいですね……」

「で、一応聞くが、おまえの他に誰がやんの？ おまえ楽器できんの？」

「えつと……僕の他には……」

そこで良太は、廊下に立つている恭介を指さして、「恭ちゃん」と、僕と……あの、言いにくいくらいんですけど、樂器はまだ、持つてません」

そこで、松尾がばつが悪そうに額に手を置いた。

「アリエネエ！ おまえおちよくなつてる？ 楽器もいいけど、見た目どうにかしろよな、なんだよその前髪、素材悪くねえんだから、努力くらいしろ、話はそれからだ！」

「はあ……見た目ですか……」

「勘違いすんなよ、俺は松尾みたいに偏見ないからな、とにかくバンドはやらない。じゃ、そういうことで」

隆はそう言つて片手をひらひらと上げた。

良太は仕方なく、引き下がり教室を出て行く。

そのとき、昼休みが終わりを告げるチャイムが鳴つた。

「「めん恭ちゃん」

良太は廊下に出て恭介に、挙むように謝った。

学校帰り恭介の家に、良太は立ち寄った。

恭介は言葉少ない良太を心配していたが、寡黙な性格から気の利いたことは言えなかつた。

良太は椅子の背もたれを逆にして座つてゐる。

恭介はベットに腰掛けっていた。

「ねえ、僕たちってさ、外見とか気にしたことなかつたよね……髪型とか、服装とか、今まで普通にしてたつもりだつたけど、普通の基準を知らない僕は、やっぱりただのオタクなのかな」

恭介は静かに聞いている。

「なんだか空回りしてゐる。『めんね恭ちゃん愚痴つて……』

「いいよ、俺気にしないから」

良太はしばらく目を瞑り黙り込んでいたが、家庭用ゲーム機を取り出して電源をつけて、

「だつて、おもしろいもんね。アニメやゲームつて」と言つて微笑した。

恭介は隣に座り直してコントローラーを握つた。

それから一人はしばらくゲームに没頭した。

「やつたねブイ」

ゲーム画面上では良太のキャラクターが屹立し、恭介のキャラクターが倒れ込んでいる。

良太はゲームで勝つたのだが、現実でもポーズを決めている。そのブイサインはちょっといや、かなりぶつかこうである。

「恭ちゃん、明日はちゃんと起きてね」

恭介は黙つてうなずいた。

そろそろ夕食時であるので、良太はきりのいいところでゲームを終わらせ、ゲーム機を直した。

「また明日来るよ」

「うん……」

空は茜色に染まっている。

良太を勝手口まで送る恭介は、おずおずと言った。

「良太くん、バンド本気ですか？」

「わからない、恭ちゃんはどう思つ？」

恭介が質問を質問で返されて、答えに窮していると、

「中学の頃はいじめられていつも恭ちゃんに助けてもらつたでしょ。でも高校生になつて、恭ちゃんの欠席が増えて、どんどん性格が変わつて……昔の恭ちゃんは、とても静かだつたけど、じつしりしてたと思う。だからこのまおじやいけないって、でも僕何もできなくて……あのときチケット押し売りされてライブいつてさ、隆君の歌声を聴いたときにはこれしかなつて感じたんだ。だから僕決めたよ、バンドをするつて！ 今度は僕が恭ちゃんを助ける番だね」と、良太は言つて肩を下げる。

「バンドということを思いついたのは始業式の前日なんだよね」

「あのおれ」

と、恭介が言つたがそのときにはもう、良太は踵を返していた。

## このいの気持ち

中山椿は、夢見後心地だった。

ふらふらする足取りで、自室にある冷蔵庫を開けると、円どりさぎが描かれている箱の中からプリンを取り出した。プリンの他にも和菓子や洋菓子が幾つかあった。

机の横には鏡台があつて、鏡と向かい合いつようにプリンを食している。むしゃむしゃと。

時折体が震えている。それは口を動かす合間に左手で、ニアギターさながら指を動かしているからである。

ふだん物事を深く捕らえる傾向にある椿だが、朝のいつときはこうやつて思考が奪われている。これは中山椿が停止している時間であつて、決して素ではない。

中山椿の親友である、隆がこの痴態を見れば、「ヤリとするとだろう。

今は、故合つて二人は口を聞いていない。  
食べ終わる頃には意識も目覚めており、椿はまばたきをすると、机に向かつた。

「私の足長おじさんへ」

という出だしで手紙を書き出したのだ。

手紙を書き終えると、丁寧に三つ折りにして、かわいらしい柄の封筒に収めた。

それをバッグに入れてから、椿は扉を開けた。  
台所にはテーブルに突つ伏した母が、椿に気づいて、  
「椿ちゃんおはよう、母さんまた、負けちゃった」

と、言つた。

母は、上品そうな顔立ちではあるが、所々白髪があつてやつれて見えた。

椿はそんな母を無視し、洗面台に向かい歯磨きをした。

およそ一年前、椿は家庭内別居を始めた。

今では母子が、話すことすら珍しいのである。

ギャンブル依存症の母を何とか改心させようと/or>していった椿も、母が自分の机の中をあさっている姿を見て匙を投げた。

椿は孤独を知っていた。

どうしても気持ちが落ち込みやりきれない日は、ただ部屋に閉じこもりがむしゃらにギターをひいた。そうすると自然に落ち着くのだ。

物心ついたときにはギターをさわっていた。

雑然とした物置に、幼い椿が初めて演奏した、ギターがあった。

椿が幼いころ、両親は離婚した。

父が最後に残したものは、そのクラシックギターだった。

決して開かれることのないその部屋を通り過ぎるとき、椿はほこりの被つたギター、その一角を見入ってしまうのだ。

用意が終わると、椿は家を出た。その間、母を見ようともしなかつた。

背には体と不釣り合いな、ギターを背負っていた。

県営住宅から学校まで、徒歩で十行程の距離で、椿はその日の気分によって自転車通学と徒歩通学と変えていた。

道路を挟んでながえ川が横たわり、橋を越えて遊歩道を通つて道路を右に折れると校門から近い交差点が見えてくる。

教室に着くまで誰一人挨拶を交わすことなく、席についてからも松尾一人がすれ違いざまに、「おはよっす!」と声をかけたくらいだつた。

ホームルームが終わると担任に呼ばれた。

それは保護者の承諾が必要な、提出物が出ていないせいだった。

担任の村山は、

「昼休み先生の所に来るよ」  
と、言つた。

午前の授業が終わり、椿は担任の言いつけ通りに、職員室に向かつた。

廊下を歩いていると、掲示板に目が留まった。

バンドメンバー募集という掲示物だった。

クリスマスライブの後、椿はそれまでバンドの練習、ギターの上達のために何とか耐えてきた、メンバーの質の悪さ、いい加減さに我慢できず、あのバンドを抜けたのだ。

そこでこのメンバー募集は渡りに船だった。

同じ学校の人なら何かと便利かもしれない。

椿は携帯のメモリーに、羽柴良太の番号を記憶させた。

溜め息をついてから、良太は首を横に振った。

「今日も駄目だつた……隆君たちと僕たちどうや、何だか住んでる世界が、違うみたいだよ……」

良太は恭介をうらめしそうに見つめて言つた。

「世界……」

「今ままじゃ駄目だつてそう思つたんだよこんなオタク！」

「バンドと関係」

「意地になつてきたかもしない。だけどさ、ダサイよりカッコイイ方がいいよね？ もてないより、もてるほうがいいよね……僕たちこれじゃ駄目だ！」

良太は話しながら興奮している。

「ライブのときの隆君、恭ちゃんも見たでしょう。あのときの歌を聴いて、僕の中に何かが駆け巡つた……そんな気がするんだ」

「俺、音楽詳しくないけど、良太君の言つてることわかる

「ごめんね、八つ当たりして」

良太はそう言つて教室へと入つていった。

恭介も後に続いた。

二人が弁当を広げているとき、良太の携帯電話が鳴つた。

恭介は良太の表情が、ころころと変わるさまを見逃さなかつた。

電話が終わると良太は喜び勇んで言った。

「恭ちゃん、バンドの後一人が決まったかも！」

待ち合わせ場所は、学校からも近い、遊歩道沿いの噴水のある公園だった。

二人は落ち着きなく辺りを見回している。

学校が終わると、恭介を引っ張るように連れてきた良太だった。恭介は芝の上に立ち空を眺めている。快晴である。

良太はにこにことしている。

一人が立っている後ろから、彼女はやつてきた。

「もしかして、あなたが羽柴良太？」

良太が振り返り、恭介も振り返った。

「はい。僕が羽柴良太です」

「じゃあ、あなたが募集かけたのね、あたしは山中椿」恭介は振り返ってすぐに、ロボットのような動きでぎこちなく固

ました。

「はい、山中さんですね。A組の」

「知ってるんなら話は早い。あたしは」

後ろのギターを指さして、

「ギター希望かな、そつちは？」

「えっと……非常に言いにくいんですけど……楽器はまだ持つてません……」

良太はそう言って、引きつった顔で恭介を伺つた。

まさか、あの山中椿が来るなんて、思つても見なかつたのである。それは恭介も同様だらう。

「え？ 誰かに貸したとか？ 壊れたとか？」

「いえ、全くの初心者です」

椿は目をすっと細め、腕を組んだ。

「あなたたちからかつてるの？ 募集じゃなくて、仲良くバンドしましょうでしようそれは！」

「そうですね……」

良太はたじたじである。恭介は助けてくれそうもない。「じゃあ、あなたたち、見た目通りのただの凸凹コンビのオタクじゃない」

「だから隆君も、とりあつてくれないんだね」  
「ぼそりと良太が言った一言に椿は反応した。

「何、あなたたちって隆の知り合い？」

「知り合いというか、ヴォーカルになつてもらいたくて……毎日誘つてるんですけど、断られ続けてて、見た目からなおしてこい、話はそれからだつて言わされました」

「隆がそう言つたのね！」

椿は腕を組んだまま、勢いよく言つた。

「あの、本当にご迷惑かけました……僕たち出直してきます」

良太がそう言つと、

「待ちなさい！　まだ話は終わつてない、凸凹コンビー！」

二人は肩を震わせた。

「デブは遊歩道を走る！　チビはあたしについてくる！」  
恭介は、ぎこちなく首を回し一度椿を見てから、

「はいっ！」

と言つて、走り出した。

「あの、どこにいくんですか？」

と、良太は言つたが聞き入れてもらえず、先に歩き出した椿の後を追つた。

椿は住宅に寄つて、自転車に乗り換えた。

徒歩で付いてきていた良太は、それからは走りに変わつた。

国道沿いにいつて、二人はコスモスタウンフリーモール、市内の中心部へと入つたのだが言わずもがな、良太は汗だくである。

暖房の効いたごぎれいな室内、奥にはソファーがあつて、入り口からすぐ近くにはカウンターがあつた。

椿は良太を無理矢理室内へと引つ張りこんでから、カウンターに立つ男に、

「ゆかりちゃんいる？」

と言つた。

「椿ちゃん、今日はどうする？」

と、男は言いつつも、顔だけ振り返り奥にいる女性を見た。それに気づいた、女性は椿に向かつて手を振つて合図をする。「うーん、あたしじゃないんだ。今日はこいつの髪を、どうにかしてほしいのよ」

生まれて初めての美容院で、良太は緊張している。

「どんなふうにする？」

男は良太の厚ぼつた髪を見て言つた。

「とにかく、かつこよく 無理だわ。かわいくしてくれれば」

男が良太の髪をかき上げると、

「あ、ごめ、眉もしてあげて、サービスで」

と、椿は言つた。

「うちはそんなサービスやってないんだけどな、それじゃ少し待つててね」

男はそう言つて、奥へといつた。

「良太、あたしこれから用事あるから、帰らなきゃだけど、逃げたりしたら、メンバーになつてあげないわよ」

椿は、入り口に手をかけ振り返りながら言つた。

「え、じゃ、じゃあ！ 一緒にやつてくれるんですね！」

と、良太が言つた。

「まあ、あなたたち次第だわ、隆を引き入れるのは難しいわよ」

「僕、がんばりますから！」

「それじゃあね、走つてるやつの方もよろしく」

椿は出ていった。

恭介は走つていた。体は汗まみれになり、呼吸も荒くなるが足を

止めなかつた。

今まで、ただ見ていただけの存在の山中椿と、話をすることができたのだ。

それがかなつた今、走ることに何の苦労があるとこ「うのだらう。」  
一步一歩進むたびに、思考がくつきりと浮かび上がつてくる。  
今までの怠惰な自分を呪つた。

こんなことなら、瘦せておくんだつた。今さら、やう思つても遅いが、それでも完全にあきらめていた事柄に、ほんの少しだけ希望が見えた。

夕焼け色に染まる公園 良太君は何をしているんだろう……。  
恭介が遊歩道の入り口を迂回しようとした、顔を上げたそのとき、人がいたので、避けようと体を動かして走る。  
ちょうど逆光になり辺りがよく見えない。

「恭ちゃん！」

驚いて恭介は立ち止まり振り返る。  
そこには良太が立つていた。

まゆ毛を細く整え、長すぎた前髪を切り、短く無造作にまとまつたその愛らしい容姿は、童顔な良太にとてもよく似合つていて、同一人物とは思えなかつた。

「良太君？」

「そうだよ、わからなかつた？」

恭介は傍らにいくとまじまじと見た。

「俺、驚いた。本当に良太君だ」

「終わつて鏡を見たとき、僕もびっくりだよ、ねえ似合つてるかな？」

？」

「う、うん、すごそのいいと思つ俺」

良太はにっこり笑うとブイサインを作つて

「恭ちゃんやつたね、ブイ」

以前と同じオタク的動作なのだが、良太の外見が変わつたことにより、とてもよくにあつていた。

恭介は口をポカンと開けた。

「あのね、恭ちゃんもバンド一緒にしてくれるよね。山中さん入ってくれるって」

恭介は良太をじっと見つめて、

「俺も……。やりたい」

と、言った。

「ほんとのほんとに?」

良太はつぶやくように囁いた。

「俺もやる!」

と、違和感のある大声で恭介は答えた。

「よかつた……撲う……恭ちゃんがいやだつていつたりもつ……」

それから一人は帰るべく並んで歩き出したわけだが、どことなく恭介はよそよそしかつた。

明け方、携帯電話が鳴った。一度、二度と呼び出し音が続く。隆は寝惚けて携帯を投げつけ、壁に当たる。いまどきの高校生は着信音を、デフォルトの状態で使う輩は少ない。

そのためか、ピッピとこうせかましこ音は妙に家中に響いた。今日こそは無視をしてやる。

隆は、「ああ」と声を漏らした。

こんなやりとりがここ数日続いていた。

毎日決まったような時間に、いつも起きていたのである。

隆は携帯電話を取って通話ボタンを押した。

「真紀、おまえさ、今何時か知ってる?」

と、言った。

「どうしてわたしつてわかったの?」

受話器からは、真紀の声が返ってきた。

「おまえしかいないだろ! じゃそういうことだ!」

「ちよつと待つてちよつと待つて

いつも結局隆は疲れぬまま、学校へと行くのである。隆が、切らうとするたびに、ちよつと待つて待つて繰り返すのだ。

よつやく話も終わるころ真紀は、

「今日も学校よね、いつでらっしゃい

と、まるで自分がモーニングコールでも、しているよつてしまふのだと、

携帯電話を鞄にしまつと、アンティーケなレコードプレイヤー、ヘッドホンを落として音楽を流す。六十年代のロックが流れている。その間、着替えを終わらると、隆は居間に出了。

「お兄ちゃん、誰といつとも話よるん?」  
と、妹の恵は朝食を食べながら言った。

「一つに結んだ髪の束が揺れている。

「別にだれでもいいだろうが、おまえに関係ねえ」  
「もしかしてさ、ライブのとき一人で逃げた、女人じやないん?」

隆も座り、朝食を食べる。

「メグな、受け付けしようたやろ、あの人誘つた張本人なんよ」  
「アリエネ工おまえか、一般人引き入れたやつは」

「あの日、椿さんと仲直りした?」

「いや……」

妹は肩を落とした。

「三人でせつかく計画練ったのに……おにいちゃんのバカ」と、言つて、恵は立ち上がつた。

「なんだ計画つて、俺聞いてねえよ」

「知らないのは、おにいちゃんだけ」

それから妹は、浴室の方へ歯磨きをしに向かつた。

隆は（？）で朝食を食べ上げると浴室に戻つた。

しばらく音楽に耳をかたむけていた。

すると用意を終えた恵がやつてきて、「お母さん夜勤明けで、今寝とるけんな」

と言つて、恵はどたばたと足音を立て学校へ向かつた。  
隆はゆっくりと浴室に続く扉を開けると、泥棒のような足取りで置みを踏んだ。

奥には、母が寝ているのが見える。

壁際に乱雑に積み上げられていた、漫畫本が揺れて落ちた。  
すると、母はぬつと上半身だけ起こして、

「バタバタうるせえ！」

と、怒鳴つて隣にあつた枕を投げつけた。

隆は思わず悲鳴をあげそうになつたが、何とかこらえた。  
洗面台についたときには、おもわず溜め息がもれた。

「あぶねえ、起こしたら殺される」と、言つて、歯磨きを始めた。

顔を洗つてタオルで拭く。

「計画つて何だよ」

自室に戻つて用意を終えると玄関に向かつた。

隆はバイクのエンジンをかけると、道路に走り出た。

形状はスクーターのようだが、イタリア製のバイクで排気量は五百ccである。

学校では、原動機付き自転車の取得は校則で認められているが、自動二輪の免許は校則違反に当たる。

しかし、外見がスクーターにしか見えないことと、生徒の自由を重んじる校風、白紙の生徒手帳とこの学校では呼ばれているが基本的には校則が、あつてないような状態になつていて。

そのまま学校まで乗つていくことはできないので、市民体育館にバイクを止めて、そこから徒歩で学校に向かつた。

ちょうど交差点で松尾淳一が、にやにやと笑いながら隆に話しかけた。太い眉が印象的で横にも縦にも身体は大きい。

「よう、眠そうな顔してるなあ」と、肩を回してきたので、

「暑苦しいぞ、おっさん」と、隆がやり返す。

「俺のどこがおっさんだ?」

信号が青に変わり歩き出す。

「すべてが」

「じゃあおまえは、オカ」

「それ以上言つたらゆるさん!」

ちょうど、校門が見えてきて、横断歩道を一人は渡つている。

そのとき、山中椿がギターを背負つて歩いているのが一人の視界に入った。

松尾は、

「今日も一匹狼ですか、山中はほんとにクールだぜ、ま、そんな俺はアウトローだが」

と、椿を見て言った。

「おまえのどこがアウトローだよ」

チャイムが鳴つたので一人は急いで教室に向かつた。

ホームルームが終わると、隆は担任の村山の下へいった。

「先生ビデオまだ？」

「悪いな。先生まだ、ダビングできてない。もうちょっと待て  
「ま、大事にしてくれるんなら、いつでもいいけど  
「しかし、よくあつたな、何年も前の特番の映像」

「母さんが残してくれてたから」

「そうか、先生悪いこと聞いた」

「いや、いいよ。それより、どうビデオ？」

「凄いなあ、まさにあのバンドの音楽だつたよ。死して尚語り継が  
れる」

「そうそ、で、テープの音源で音悪い部分は「一ラス入れたりね  
「六十年代のロックで、リーダー死んでいるから、本格的な再結成  
は無理だ。でも、先生泣いちゃつたぞ」

「俺も俺も」

隆は興奮し、饒舌になりつつある。

そこでチャイムが鳴つて、

担任は隆の肩を軽く叩いて、教室を出て行つた。

昼休みになり、松尾と昼食を食べている。

「それ、メグちゃんの手作りだろ、いいな

「別に普通だろ、何がいいんだ？」

「おまえってやつは、女心もとい、妹心のわからんやつだな

「アリエネ弁当」ときで大げさだな」

「じゃあくれ

松尾が隆の弁当に箸を落とすとするが、隆は「う」とく避けていた。

そんな隆を生温かい田で見ている松尾。

「ライブのとき、メグちゃんのサンタ姿、かわいかつたぞ」

松尾がそう言つと、隆は思い出したように、

「おまえさ、恵と何かたくさんでただろ」

「何のことだか

「椿のことだ

「何のことだか

そう言つてると、後ろから声がした。

「あの……隆さんバンドの件でお話があるんですけど、今いいですか？」

声だけを聞いて隆は、辛辣な表情を作つた。

「おまえな、いい加減あきらめろよ」

と、振り返つて一瞬だれと話をしているか喪失した。

「僕、少しさましになりましたか？」

良太は恥ずかしそうに、はにかみながら言つた。

「驚いた！ 食つてるもの吐きそつ

良太は笑い声を上げた。

「おまえさ、えつと、羽柴……良太だよな？」

「はい、そうです」

「すげえな、デヴューしたな！ 遅い高校デヴューおめでとうな。まさかここまで変わるとほ

松尾も驚いている。

「あ、ありがとうござりますー。」

「前向きなオタクだなとは思つてたが、顔と内面が合致したな。ああ、俺、そこらへんにいる、趣味も情熱も何もないやつより、オタクの方がまじだと思つてたから、安心しない」

良太はまじまじと聴いている。

「みんなが好きと言つたら好き、ファッショニシろ、音楽にしろ。個性も何もねえからな……これからが大変だぞ、とにかく、自分の色を見つける、雑誌もみなきやな、しかしそくがんばった」良太は涙ぐんでいる。

「じゃ、じゃあ、一緒にやつてくれるんですね？」

「それとこれとは話が違う」

松尾が額に手を置いた。

「あの、約束が……」

「何？俺、おまえが変わつたら話は聞くつて言つたけど、入ると

は言つてねえ」

「そうでしたね……でも僕絶対にあきらめませんから」

「ま、でも、これからも気軽に話しかけれ、じゃあな」

良太は教室から出ていった。

土手の小道には、重そうな衣服を着込んでジョギングしている主婦。

その下、河川と青い草の斜面に挟まれた広場には、犬の散歩をする少女、

隆は学校が終わると、家には帰宅せず、近所の土手で川縁の石段に腰をかけて、首からノートをぶら下げている。

目を閉じ、息を吸い込み、歌い出した。

その歌声はこの光景に違和感を与えず、空氣のよつに透明に流れていった。

時折、口を動かすのを止めたかと思えば、ノートに何かを書き込んでいた。

隆が父、宏大の影響で六十年代の音楽を好きになり、初めて歌つたのがこの場所だったのだ。それからというもの、毎日隆は歌つた。宏大は、二歳の隆が英語で「うそ」と発し、歌い出したたそのとき、大粒の涙を流して喜んだのだ。

幼い隆は抱きしめられながらも、

宏大に対して、こうすれば喜んでくれるんだ。と感じ、ますます歌にのめり込んでいった。

それと知らずに歌うという英才教育を受けていたのだ。

隆の家庭は、世間一般家庭とは少々異なつており、父、宏大は女装している姿が普通であつたし、家事をこなしているのも当たり前であつた。

母、涼子は市内にある病院で看護師長をしている。

夜勤明けで機嫌の悪い涼子に、優しく声をかけマッサージをしていた、宏大の姿がそこにはあつた。

宏大が亡くなつてからとくもの、涼子と隆はよくいさかいを起こし親子喧嘩がたえなかつた。

それは、当たり前の母を父親として接してきたせいだらう。

事実隆は、宏大のことを母さんと呼んでいたし、涼子のことを父さんと呼んでいたのだから……。

この場所にくれば宏大の、あの後ろ姿をいつも思い出す。エプロンをして、長い髪の毛を後ろでまとめたその様子を、隆は歌い終わると立ち上がつた。

川面を見つめ、ふと羽柴良太のことを考えた。

放課後良太に廊下で出くわし、バンドの件を断り続けているのにも関わらず、元気よく「さよなら」と言つてきた。

不思議なやつだ、隆はそう思った。

夕食どきになると、涼子はのろのろと起きて来て、恵の作った料理に舌鼓を打つ。

ビールを飲んで、

「うめえ！」

「お母さんオヤジくさいからやめて」

「バカ息子、メグが言つた長電話の相手はだれだ、女でもできたか？」

夕食に手をつけよつとした隆に涼子が言つた。

「友達友達」

「おまえ友達いたか？」

「失礼な」

「松尾君に椿ちやん？」

「……」

「メグが言つにほ、ライブのとき女と逃げたらしいな、バカ息子」涼子は「ヤーヤ」と笑つてゐる。

「恵！」

隆が一喝すると、

「だつて、おにいちゃんが悪いんよ……」

と、言つて恵はテレビの方を向いた。

「おまえには関係ねえ」

「何イ……」

涼子は怒鳴りながら隆の眉間に箸を直撃させる。

「もう、一人ともやめてよ。SAYAの曲が聴こえないから」テレビは音楽番組をやつていて、ランギングを行つていて、女性アーティストの歌が流れている。

「おまえさ、食べるのやめてまで、見るもんじゃねえだろ」「おにいちゃんと音楽の話したくない。SAYAは違うんよー。」「おいバカ息子、妹の夢を壊すな。おまえと、宏大さんは音楽の話になると、斜め上をいきすぎている」

「俺のことばいいけど、母さんのことけなすなよー。ボケー！」

涼子はさつと立ち上がつた。

「やめてよー。もう……おねがいやけん」

多少の喧嘩ならとりあわない恵だが、さすがに止めに入つた。静まり返る居間、隆は夕食も早々に切り上げ部屋にこもつた。涼子は仏頂面で一升瓶の焼酎をグラスにくむ。

恵は番組が終わると食器を片付け始め、台所から洗い物をする音が寂しく響いた。

「いつもの時間に真紀から電話がかかつたが、隆は今までのようじ、元のよ

放置することもなくすぐに出た。

そして隆は、夢うつつの中、なぜ宏大が死んでしまったのか、どうして歌が好きなのかと、いったことを淡々と真紀に聞かせた。

その日は一言も真紀は「ちょっと待ってちょっと待って」とは言わなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7681z/>

---

ウレハ

2012年1月1日21時47分発行